

旅行記

旅の中の詩情

北九州歴史の旅より

会員 富澤 泰

○海峡の潮の流れ

祇園惜舎の鐘の聲、諸行無情の響あり。

婆羅雙樹の花の色、盛者必衰の理りをあらはす。

おこれる人も久しからず、唯春の夜の夢のごとし。

平家物語冒頭の一節を口ずさめば、王者平清盛の死を想い、壇の浦に平家潰滅の刻を抽き、はたまた大原に遁世の建礼門院のことを偲ぶのであるが、今日(十月二十二日)佐伯史談会の歴史の旅に加わり、下関海峡の潮の流れを前にすることが出来た。

今日変り果てている関門の海、マリンパレスの岸壁に立って、東の海上に近く浮かぶ千珠島、満珠島に、自旗ひるがえす源氏の兵船西の方彦島の彼方に赤旗立て並べた平氏の軍船、心で描くしかない今日である。

その壇の浦の劇突は、海峡の潮流を巧みに利用した源氏の用兵に、平氏の惨敗は決定助となつた。時は寿永二年(一一八三)春三月、今から凡そ八百年昔のことであるが、この勝敗は單なる用兵の妙のみであらうか。人の世の盛者必衰の輪廻、平家物語の心が今さらのように感じられる。

今、その決戦場壇の浦の近くに、高々と関門鉄橋が架つている。私たちが一行四十名は、先程バスに乗ったまま全長二〇六八メートルを低速で渡って来た。八百年の歲月はこの歴史ある海辺を、一切近代助けぬりかえていている。幼

帝安德天皇を抱き奉った二位尼が「浪のしたにも都のさぶらふぞ」と慰めつつ(平家物語)海底に身を投ぜられたのは、どのあたりであつたのか。

いまぞ知る 御裳川の流れには 波の下にも 都ありとは

安德帝の僅か八歳の小さな御遺体は、竹崎(今下関駅近く)の沖合いで漁師の網にかかつたと伝えられ、そのご冥福を祈つて阿弥陀寺が営まれたという。そして明治の排仏毀教によって、後白河法皇の頼願寺から官幣中社と変わって、今の赤間宮とはなつた。

その赤間宮の門前近くに車を駐めて、打ち連れて参拝した。会者定離の無情の中で幼帝を追慕する廟所であるが、丹塗りも一さわあざやかな異国風の楼門、それは私どもに波の底の龍宮をすぐ連想させるが、華麗な神殿と共に、明るく官殿建築といえよう。

神社には、何組もの結婚式の美しい人の群があつた。今日は大安の黄道吉日であろうか。私たちはこの人群にまぎれてエトランジェ(異邦人)のような感興になりながら拝殿を覗いた。

社殿の左手森陰には、平家の公達の眠る「と盛塚」や「耳無し芳」の祠があつた。合掌瞑目すれば、おが身も平家哀史の一人となり、少し懐旧の情にとらわれる。

すぐ隣する 安德天皇の御陵にまいる。安德陵は西日本唯一の天皇陵であるが、赤間宮のきらびやかな陰にかくれて目立たないのが、却つて詣でるものの襟を正させるものがある。

社頭に立ってながむれば、海峡を往き来する船の姿が次々に見える。対岸門司も手にとるよう近い。宮本武蔵と佐々木小次郎対決の巖流島、四か国艦隊を砲撃した幕末の動乱、その世日本の歴史の流れを物語るものが多いからもある。

私達は、今度は海底トンネルで下関を後にした。詩人

中原種夫の詩を思いつつ、なおしばし下関に思いを残していた。

海峡の潮は東へ流れ、また西へ流れる。
西へ流れる時、平氏は滅び、
東へ流れる時に維新ののろしは上がる。

此の海峡を軸として、日本の歴史は動く。

潮は今日もはげしく流れてやまない。

バスは国道バイパスを一路西へ、今夜の宿泊地福岡の志賀島へひた走る。

日はもう落ちてしまった。

③ 志賀島から博多へ

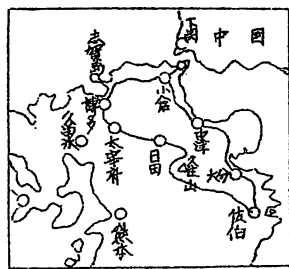
朝騒の音に目をさます。外には昨夜のはげしい雨の音、残りの小雨が降っている。

国民宿舎「しかのしま苑」の裏は博多湾である。昨日の行程が長かっただけに、夕闇の中を車でここに着いただけに、途中も宿の様子も判らなかつた。

朝食前の散歩がてら、金印発掘の地と蒙古塚の見学を——と、昨夜夕食の席での羽柴幹事の提案に従って、六時半に一同連れ立って宿を出た。幸い雨は止んだが、玄海灘からの微風が寒く頬をうつつ。

右手には急傾斜の畑山、左道下は海、半農半漁の村らしく、防風がきかぬゆからさか台風や冬の季節風は備え、その内側は夏樹が点々と実っている。

道下の狭い砂浜では、何人か魚の餌を振っている。声をかけて金印公園をたずねると、もうすぐだという。雲は低く垂れ、玄海を越えてくる荒波の海だけに、今日の天候が気がかわれる。



一まも歩いて道を曲ると、すぐ向こうに目指す金印祭極の地の碑が高く立っている。自然石の大きな石碑は「漢委奴国王金印発光之處」とあり、その脇の僅かの坂道を登ると、上は金印公園と名付けられている。

天明四年(一七八四)、志賀島の百姓甚兵衛が、田の溝の修理をしながらその跡地に発見したという。当時からこの金印をめぐって論争が行なわれたが、此処での発掘が定説となっており、日本の古代史追求の決め手となった史料である。門外漢の私は、側に建ててある説明板をそのままに研読し、すぐ先の岬の蒙古塚の人々の後を追う。

道から急な石段を上って供養塔を訪ねる。元寇の当時没した蒙古兵の遺体を集めて葬った慰霊塔である。足を駐めて合掌する。

時の流れは恩讐を越えて此の塔に刻まれ、「南無妙法蓮華經」の巨大な碑の、莊重な文字の流れをたどる。東郷平八郎元帥・田中義一大將、中国の張作霖將軍などが、この経文の文字を揮毫している。みんなかつて英雄とされた人達である。大正二年の建設であるが、これにすら既に六十数年の時代の変遷、大きな流れがある。

志賀のあまの塩たぐ煙風をいたる

立ち足昇らず 山にたなびく 羨み知らず

志賀の白水(海人)は、他にエト葉に歌われているが、神功皇后征韓以来、大陸との交通の重要性や、那珂津の大宰府官人等に必要な漁撈からも、重要な存在だったに違いない。

時間的関係で、ついに詣でることの出来なかった志賀島神社が、阿曇部、海人率いた阿曇氏の祖神とされる水 砂を神社せと

い。志賀島から博多に折返す道は、景観「海の中道」の松林とを、砂浜でつないでいる。砂洲の左は、玄海の風浪を真受けである。初冬の

曇り日に北の風は荒く、波頭は白く立騒ぎ、船影は全く見当ら
ない。

博多には七世紀の初めごろ、筑紫大宰府が設けられ、
九州統治の中心地、外交の中心地の那の津、日
本古代史の中心地であり、大宰府が今の都府楼跡に移
つても、国際貿易港としての重要性は変わらなかつた。鎌
倉・室町時代中国文化が輸入され、現代に到って福岡に
変つても、九州の中心であることは変わらない。

博多では香椎神宮・笠濱八幡宮と巡拝し、市立歴史資
料館に「弥生時代の対外交渉展」を見学し、福岡城址か
ら元寇防塁跡とまわり、昼近くバスは大宰府に向つた。
私は今日の博多の日程を、廣瀬淡窓の詩「筑前城下の
作」で回想して見たい。

伏敵門頭浪天を拍つ、当時の築石自から依然たり。
元兵海に没す跡猶在り、神后韓を征すこと久しく伝う。

◎ 大宰府天満宮

大宰府天満宮の門前所は、名物梅ヶ枝餅の呼び声を聞
いたのは、もう正午であつた。神社の梅の大樹の水浅れ
日の砂利道から太鼓橋を渡り、楼門をくぐれば大きな社
殿の前、名木「飛梅」が右手にすぐ目につく。

東風吹かばにほひおこせよ梅の花
主として 春を忘れず

道真が都を去る時、庭前の梅に惜別の歌を残したが、
主の心を慕って京より空を飛んで、此の地に来たと
いふが、この梅はその何代目であるか。梅はまた小さく姿
と現わしていない。

菅原道真が右大臣の官位に併せて、左大臣藤原時平と共に従二位に
叙せられたのは、宇多天皇の昌泰四年(九〇二)の正月七日、それから僅か
十七日を経て正月十五日には、官位を剝かれて大宰権帥として配

流される身とはなつた。王朝政治の中での藤原一門の権力の絶大なる前
には、文学の家菅原氏は弱かつたが、それにしてはひどい仕打で
あつた。大宰権帥は大宰府の副長官の名称であるが、中央政治か
ら左遷された官人は、條録を給せられるだけで無用の役名、政務は
次官の大貳あるいは小貳がとつていた。

去年の今夜 清涼に侍す (題 九月十日)

の詩は、夏淵と菟若の中での詠吟であるが、同行を許され左遷
児すら失つた道真は、二年余の後の延喜三年(九三二)月、孤愁の
中にその一生を閉じた。行年五十九才。廟所安楽寺に、神託によ
つて神殿が建てられ、天満宮安楽寺となり、後、道真四世の藤原
原輔正が大宰大貳として赴任するに及び、天満宮安楽寺は、九州
有数の大寺とはなつた。

罪人として配流された人が、天神として平安京、京都
の北野神社として祀られたのは、道真の没後四十数年を
経ていた。そして更に官制によつて全国に信仰を波及し
たのは何故であつたか。

醍醐天皇の身辺にも、藤原時平の一族にも不幸が続出
し、また宮殿に大落雷があり、多くの官人が死傷するま
どが、皆道真の怨霊の故だと信ぜられ、畏怖から崇敬へ、
そして更に天神へと昇華して行つたのである。しかしこ
の根底にあるものは、藤原権力に対する国民大衆の反感
抵抗であつたことは否めない。

◎ 都府楼跡と観世音寺

都府楼跡は天満宮より遠くない。この辺りは筑紫野毛
南端で、田園の広がりはろく、それを囲む山脈は低くな
だらかで、それをたまたま見れば、大和飛鳥の地に似ている
といわれるが、なるほど来て見ると、全くそのように考
えられる。

廢虚となつた都府楼跡には、大小の礎石が点々として

残り、その礎石の縦横の広がりから見て、在りし日の
 壯大な宮殿の姿がうかがわれる。七世紀後半、大和朝廷
 は那の津より太宰府へ後退、都府樓を中心にして「遠の朝廷」と
 称せらるる程盛大をなしたが、天慶四年（九四二）藤原純
 友の乱により、炎上してしまった。これらは今福岡市在
 住の佐鶴会員の「都府樓の沿革」のご解説であった。

風が寒かったが一同は集って、青山の染矢会員のカメ
 ラに納まった。そして宿に着くにはまだ早いのでバスに
 乗り、程近い観世音寺に向った。

松林に囲まれ、樟の大樹の奥に観世音寺の古さびた本
 堂が高く仰がれる。

ここも亦純友の兵火にかかり焼失したが、天智天皇が
 御母斉明天皇ご追福のために工を起し、七十年余を経た
 聖武天皇の天平十八年（七四六）に完成したといひ、九州第
 一の靈場と稱せられた。その輪奐の美は今見るとも
 ないが、仏像をはじめ寺宝の数々は、隣接の收藏庫に陳
 列公開されている。そして藤原時代のすばらしい仏像と
 拜観することが出来るのであったが、残念ながらその余
 裕がなかつた。

寺の裏、森を抜けて、とある民家の庭先に、玄助僧正の墓を訪ね
 る。凝灰岩で出来た空笠印塔であり、洞窟の玄昉はここに眠って
 いる。かつては悪名高いたの道鏡に劣らぬ派華を極め、日本最初の
 勅許による紫衣を賜わり、僧正の座にいたが専横の振舞多く、筑
 紫に配流され、ここに眠っているのである。

廢墟都府樓をめぐっての茶枯盛衰の数々の中に、観世
 音寺の梵鐘だけは、鑄造された昔のままに、今も鐘樓に
 かかっている。京都妙心寺の鐘と同時代に創られ、日本
 に唯一の古鐘である。つるされた鐘の裾に描かれた帯
 状の流麗な唐草文様は、千二百余年の古色を示し、遠い
 歴史の流れを伝えてくれる。

配所榎寺から一步も外に出なかつた道真は、「門不出
 （門ヲ出デズ）の詩で、

都府樓ニハワズカニ瓦ノ色ヲ見、
 観世音寺ニツダ 鐘声ヲ聴ク。

と嘆じたが、美しい鐘の音色は、道真の心を如何に慰め
 たであらうか。

明治の土の歌人長塚節の歌にこんな文がある。

手をあてて鐘はたふとき冷たさに 爪叩き聴く
 そのかてけきに

その鐘を、恐れ気もなく撞いた人が、私たちが一行にあった。畑の浦
 の田中光氏である。彼は京都妙心寺に詣でたとき、その鐘をついた
 ことがある。その鐘に縁のある観世音寺の鐘をついたのである。何と
 旅と旅の心を童心にかえらせるものである。この人の人生を通じて、
 清く貴くと思ひ出は、終生消えないであろう。

その晩、私たちが二日市温泉の旅館で賑やかな夕食宴
 会を開いた。高木会長のねざらいつのあいさつの後、私た
 ちは心をそろえて清田会員叙勲の光栄を、祝盃をおけて
 わがこととして喜こんだ。そして飲ぶ程に親睦の気持が
 会場にみちみち、酔うほどにそれぞれ十八番の歌や徳
 小甚が、山下会員（畑の浦）の巧妙な司会で披露される。羽
 柴幹事若き日の教え兒女子五名の追憶の「修学旅行唱歌」
 も披露され、四十数年振りの修学旅行が出来たとの喜び
 の言葉、みんないつまでも印象に残ることである。

④ 日田と佐伯

第三日目の朝九時半、私たちのバスは日田市或宜園の
 前に駐まった。偉大なる教育家広瀬淡窓先生、その或宜
 園に学んだ俊才中島子王。日田と佐伯の堅い結びは深
 い。古川先生は老軀声をしばって宜園の教育を語り、私
 達の感激はひとしおであった。

幸、日田豆田の郵便局長廣瀬恒太氏と田中冕氏は、以前からの佐伯史談会員、私どもを月限の永山城址に案内して下さった。日田盆地の成り立ち、永山城の由来、日田市街の概要など適切な説明のおど、バスは三隈川の清流にのぞき、龜山公園日ノ隈城址にまゐる。広瀬田中の両氏は随所で一行に何くれと玄く案内下さった。

公園は樹林におおわれ、それと程よく黄ゆ紅のすみじが移り、樹門の小径はかたじけなく落葉が散り敷き、小鳥のさえずりが耳に響く。とある広場は、廣瀬淡窓先生のま新しい詩碑が建っている。

龜山の城壁 秋

昨日の英雄 何処に求めん

長江に向つて 往事を説く草花

濤声月色 怨い耐えず

(意訳) 龜山の古堡は秋も盛、兵共今いづこ、夢はかきくも偲ぶのみ。問へど語らぬ三隈の流れ、たれ聞こり

るは瀬の音と、月の光りぞ胸をうつ。

龜山城は、秀吉によつて毛利高政がこの地に封ぜられて扱った城、五層の天守と三層の櫓を築いていた。慶長五年(一六〇〇)九月、天下分け目の関ヶ原の戦いが起つた。当時中津十二万石の黒田長政は東軍徳川に味方し、豊後の守護職大友吉統の一党を石垣原に破り、その勢をかりて日田に上つた。しかし毛利勢が東軍とわかり、黒田勢はその困みととき、城は一応黒田方に明け渡したが、後再び毛利高政が政務をとつたが、翌慶長六年には高政は佐伯藩二万石の領主として、封封することとなつた。

前掲の詩は当時の龜山城さうだったものだが、われわれ佐伯人にとつては「因縁深い」詩ではある。詩碑は、当地の老人クラブの方々、広瀬氏の手によつて、昭和四十五年の建設であるという。解説下さる広瀬氏は淡窓広瀬家の当主広瀬代議士の弟御であり、数年前から佐伯史談会に加わられ、田中氏も先達て入会なさっている由と高木会長から聞き、日田と佐伯の密接していること驚くばかりである。公園を後に、私たちが淡水魚センターに車をよせた。

見れば当地もう一人の会友高倉孝男先生が待っていて下さつた。三氏も加わっていた。名物の鯉料理の昼食を共にした。残念であつたが養魚場の見学は出来ず、三氏に別れを惜しむながら、午後一時日田を後にした。三隈川上流地帯の日田杉の美林を賞しながら、バスは水分峠を越えず中村から十三曲りの九酔溪に入つた。期待の紅葉は半ば散つていたが、飯田高原のすばらしい景観に感激した。九重連山、まっ白の霧氷である。バスは所々減雪の道さたり、牧、戸峠を越して瀬本高原で小憩、遙か阿蘇、祖母、傾などを車窓に指顧しながら久任高原を横切り、竹田への道と急いだ。このコースは全く素晴しいものであつたが、紅葉の時期を失つていた。しかしバスは快調、大飼一野津を怪て佐伯に降り着いた時は五時を僅かに過ぎ、ま左日日落ちていなかつた。

会員の山下俊明君の短歌二つを掲げて、私の旅行記を終ることにしよう。

こころ待ちし溪の紅葉の散りはててつづら折り
なす山道をゆく(九酔溪)

声たててふりむく九重に初雪のつむりて史談の
旅は終りぬ(九重高原)

「佐伯史談」総目次を浩かそう(丹柴)

われらの機関誌「佐伯史談」は、こんな粗末なやりかたで、どういふ目に見ても貧弱である。しかし郷土佐伯につながる歴史・文化・民俗・その他、いろいろのことの踏査や研究の正確な記録としての価値は高いと確信している。

「佐伯史談」の綴りも数冊になつていよう。私は毎年を二冊とく、すべて十二冊となつてゐる。そしてその最初の総目次をつけることとして、活用の便を計かっている。

幸い次に入れたよう、前号につづいて四か年分の総目次を、添矢会員によつてとてえられた。それそれの年次の綴りに活用してほしい。